

斎藤弥九郎の弟・三九郎について

小谷 超

はじめに

兼六園の程近くにある、石川県立歴史博物館の「第6展示室（近世・近代の科学と技術）」のほぼ中央部に青銅製のカノン砲（レプリカ）が展示され、その解説キヤブションには以下のように記されている。

海防と大砲

幕末における海防上の必要から、幕府をはじめ各藩では、競つて大砲の铸造を手がけた。加賀藩でも弘化年間（一八四四～四七）には斎藤三九郎や河野久太郎の铸造した大砲の試射を行っている。またモルチール砲など数門の大砲を購入、铸造したことも記録に残っている。（以下略）

一、先祖由緒の書上げに見る三九郎の生涯

三九郎（新左衛門と改名後）が上田安右衛門、横山八兵衛、斎藤右内（三名宛）に提出した、嘉永四年（一八五二）五月付「由緒一類附帳」と、士族掛宛に提出した明治三年（一八七〇）閏十月、「先祖由緒一類附帳」（加越能文庫）の二点の史料では、三九郎が自らの履歴について述べている。両史料のその部分を引用する。文字は、文書の体裁をそのまま活字とすることを原則とする。

嘉永四年（一八五二）五月「由緒一類附帳」

一、六拾石

本国越前

歳四十

越中出生

斎藤新左衛門則道

この斎藤三九郎とは、射水郡仏生寺村（現在の氷見市仏生寺）出身で、江戸幕末の三剣豪の一人と称された斎藤弥九郎（篤信斎）の弟である。氷見市教育委員会発刊の『斎藤家寄贈資料目録』の巻末にある「斎藤家系図」によると、三九郎は文化九年（一八二二）二月十六日に生まれ、明治九年（一八七六）六月十二日に没したとされている。弥九郎は寛政十年（一七九八）一月十三日の生まれなので、十四歳下の弟にあたる。

私義射水郡南條組佛生寺村組合頭故新助三男ニ御座候處神道無念流劍術并高嶋流砲術相暗罷在候ニ付武家奉公相重申候處弘化二巳年四月青山故淇水軒様給人組被抱知行給五拾石罷在候處嘉永四亥年五月青山將監殿ヨリ御所望ニ而給人組江被召抱五知行右之通被下之同月御式壹

本稿では、斎藤三九郎（以下「三九郎」とする。）の生涯を通しておくるものである。なお三九郎は嘉永四年（一八五二）に新左衛門と改名するが、本稿においては三九郎で統一する。

番被 仰付相勤罷在申候且先名三九郎与申候得共奉願右之通改名仕候
(以下省略)

明治三年(一八七〇)閏十月、「先祖由緒一類附帳」

本国越前射水郡南條組

佛生寺村出生歲五十九

御切米高
一、三拾八俵七升五合

定紋菱ノ内糸桔梗

斎藤新左衛門藤原則道

居宅横山三左衛門元家中銀杏丁

私儀越中射水郡南條組佛生寺村組合頭故新助三男二御座候處幼少之

刻兄齋藤弥九郎先年より江戸表江罷出神道無念流劍術指南仕飯田町魚板

橋邊二居住仕候ニ付罷越相便居申候其後弥九郎儀博々修行可仕旨申聞

常州水戸及江戸近邊所々罷越稽古仕其後天保六年會津表へ罷越同所學

校日進館世話役海老川藏人江相便同館江罷出夫より越後筋江州膳所繫大

坂備前岡山備中等所々稽古仕同國足守藩分瀬助荻野流砲術指南仕居候

二付入門仕其後周防徳山長州萩等稽古仕筑後柳川肥前佐賀長崎肥後熊

本等稽古仕罷帰申候其外罷越候諸藩多々御座候得共其砌者多分形稽古

仕候ヶ所者指南家姓名等相調所持罷在候同十二年武州徳丸原ニおるて

長崎町年寄役高嶋四郎太夫初而西洋銃陳運動并大砲打方等旧幕府御役

人御見分之砌兄弥九郎同様入門仕大小砲打方仕同年秋水戸殿御藩中文

武御迫立ニ付弘道館御取建博々劍術高名之者御撰御招ニ相成一刀流二

而千葉周作海保帆平等御呼出流義三而兄弥九郎并弥九郎師家岡田十松

舞十松師匠戸ヶ崎熊太郎旦熊太郎門弟木村定次郎等御雇ニ相成其節弥九郎門第二而細田太一郎并私等都合七人水戸表江罷越諸流試合等被仰付日數六十日滯留御暇被下候砌熊太郎等四人江金拾両宛被下之私へ金五両太一郎江金式両被下之其節周作帆平兩人被召抱私儀未熟二者候得共御召抱之御内談も御座候得共弥九郎申聞二者父も存命仕候間他国奉公之儀者御断申上可然旨ニ付内存之趣申上御辭退仕候依而流儀ニ而金子武四郎被召出候其後砲術為修行長崎表江罷趣高嶋四郎太夫江相便リ罷在候處同人儀御不審之趣有之阿部攝津守殿江御預相成候ニ付門人何も離散仕候其節私儀金沢表江罷越弘化二年四月青山故淇水軒江召抱七人扶持給之同三年九月忽砲并臼砲等鑄造申付於打木濱初而打方仕候ニ付新知五拾石給之同四年八月裏而砲術為研究長崎表江罷越候所其砌四郎太夫儀御免相成江戸表江御用有之罷出居候ニ付罷帰同五年二月江戸表江罷越候處四郎太夫セ可連浅五郎申聞參州田原藩村上定平方江罷越可致稽古旨ニ付同所江罷越同九年罷帰申候當將監代ニ相成嘉永四年五月横山故遠江守より將監江所望ニ而給入組江召抱知行六拾石給之式壹番申付故大膳砲術指南等申付其節迄三九郎与相名乗罷在候得共相達新左衛門与改名仕候同六年六月相州浦賀表江外国船渡來ニ付遠江守江戸表江出張之蒙 御内意候ニ付召運可申旨申渡候處重而退帆仕候ニ付不及其義旨申渡候安政元年砲術為研究江戸表江勤学仕度旨申立發足仕候ニ付右指引御用捨願候處願之通被仰渡少ニ而も快相成候て可罷出旨被仰渡候元治元年九月三左衛門儀

禁裡御守衛就被 仰付候供仕十一月上京仕候處御請取ヶ所清和院御門

御固之大砲方江州表江出張三付三左衛門手大砲方召連右御固罷寄申旨
武田金三郎申談慶應元年四月迄相勤候處金五両拝領被 仰付同年五月
供仕罷帰申候同年二月八日鍛砲并玉葉奉行申付候同年十一月御様子有
之不縮無之様被仰渡三左衛門屋敷ニおゐて相慎罷在明治元年四月於公
事場御尋之趣有之同二年正月非常御大赦ニ付御宥免被 仰付其節三左
衛門ゞ常々心得方不宜故右様之次第与之趣を以知行之内十石減知申付
同三年七月今般之御处置ニ付一代士族被差加同年閏十月一日御切米三
拾八俵七升八合之證書頂戴被 仰付候（以下略）

ここで引用した二点の史料から、三九郎が自ら書き記した彼自身の
半生についてまとめていきたい。

- (1) 嘉永四年（一八五二）で四十歳、明治三年（一八七〇）で五十
九歳であるので、生年は文化九年（一八一二）である。
- (2) 射水郡佐生寺村の組合頭、新助の三男に生まれ、江戸で剣術指
南をする兄の弥九郎を頼つて江戸へ出た。
- (3) 弥九郎から修行に出るよう言われたため、水戸、江戸近辺で
修業した。天保六年（一八三五）以降は会津、越後、近江膳所、
大坂、備前岡山、備中、備中足守藩（荻野流砲術入門）、周防徳
山、長州萩、筑後柳川、肥前佐賀、長崎、熊本などで稽古をして
帰つた。
- (4) 天保十二年（一八四二）武州徳丸原（現在の東京都板橋区高島
平）で高嶋四郎太夫（秋帆）が西洋砲術の大規模な演習を行つた
が、これに兄の弥九郎とともに参加した。
- (5) 同年秋、水戸弘道館の開館にあたつて、広く高名な剣客が招待
された。一刀流では千葉周作ら、神道無念流では、兄弥九郎とど
もに、三九郎らが出席した。その後、弥九郎や三九郎は、六十日
滞留して諸流試合等を行い、暇乞いにあたり、三九郎には金五両
が下賜された。
- (6) 砲術修行のため、高嶋四郎太夫（秋帆）に入門したが、御不審
の趣（投獄）があり、門人は離散した。
- (7) 弘化二年（一八四五）加賀藩重臣青山将監知次に召抱えられて
七人扶持を給され、同三年（一八四六）九月、忽砲（ホイツル
砲）並びに臼砲（モルチール砲）等を鋤造し、打木浜（現在の金
沢市打木町の海岸）で初めて実射訓練を行つた。その功績により
新知五十石を給された。
- (8) 弘化四年（一八四七）八月、再び砲術研究のため長崎へ赴いた。
しかし、赦免された高島秋帆は江戸に滞在していたので、翌年二
月江戸へ向かつた。そこで秋帆の息子浅五郎より参州（三河国）
田原藩主の村上定平の許で稽古するようとの勧めを受け、同所
へ向かい、同九月帰国した。
- (9) 嘉永四年（一八五二）、加賀藩老臣横山遠江守隆章から青山氏
に御所望があり、横山氏の給人組に召抱えられ、知行六十石を給
された。また、三九郎から新左衛門に改名した。
- (10) 嘉永六年（一八五三）外国语（ペリー）の艦隊）が浦賀に渡来し、
横山遠江守へ江戸出張の御内意があり、それに連れ立つて三九郎
も江戸へ向かう予定であったが、ペリーが退帆したため、出張は
取りやめになつた。翌年の安政元年（一八五四）十月、砲術研究
のため江戸へ出て、同二年五月に帰国した。

(1) 安政三年（一八五六）五月、杜鵑館の西洋高嶋流砲術師範を仰せ付けられた。しかし、同五年九月、体に痛いところがあり、指引を辞した。

(2) 元治元年（一八六四）九月、横山三左衛門隆平（隆章の孫、万延二年祖父の遺知を継ぐ）が京都禁裏護衛を命じられ、大砲方を召し連れて上京。清和院御門の警護を行い、慶応元年（一八六五）四月まで勤め、五月に帰った。

(3) 慶応二年（一八六六）八月には、鉄砲並びに玉薬奉行となつたが、同十一月、謹慎を命じられた。明治二年（一八六九）非常の大赦により赦免されるも、三左衛門より十石減知された。

(4) 明治三年（一八七〇）、七月、一代士族に加えられ、同閏十月御切米三拾八俵七升八合の証書を頂戴した。

このように、三九郎は詳細に自らの履歴について書き残している。

次に、三九郎が関わったいくつかの事柄について、他の史料や文献や先行研究も参考にしながら、述べていくことにする。前掲史料の内、後者は、明治三年に記されたものであり、記憶違いや脚色もありうること、または記述が抜けていることもありうるため、客観的な史料によつて可能な限り、その足跡を押さえていきたい。

有名な「アヘン戦争」である。この情報はオランダ船を通じて、いち早く唯一の貿易港を持つ長崎に伝えられ、それを知りうる立場の為政者や知識人らを震撼させた。長崎の町年寄であつた高島秋帆は、その情報を耳にすると、当時の長崎奉行田口豊行を通じて幕府に「洋砲採用の建議」を上書した。

秋帆はこの中で、イギリスをはじめとする西洋諸国の大砲や軍艦の性能は、中国のそれと比べものならず、これこそ中国の敗因であり、その脅威は、いつわが国に向かられるかもしれないため、早急に西洋式の砲術を採用すべきであると述べている。

老中水野忠邦は、この上書を審議した結果、秋帆らを江戸に呼び、西洋砲術の演練を披露するよう命じ、秋帆は天保十二年（一八四二）五月、幕府専用の砲術演習場であつた徳丸原で演練を行つた。

蘿山代官の江川太郎左衛門英龍は、かねてより洋学に高い関心を示し、幡崎鼎や渡辺華山、高野長英らとの交流を深めていた。華山や長英が蟹社の獄で弾圧を受けると、江川は秋帆への西洋砲術の入門を望むようになるとともに、家臣をこの演練に参加させることにした。

坂本保富氏の研究^{*1}によると、高知県立図書館蔵「山内史料」に収められた「高島流砲術」という史料には、詳細に高島秋帆門人に関する記述がある。同史料によると「御代官江川太郎左衛門家来」として、「野戰筒」役の斎藤弥九郎と、「小筒打方」役の斎藤三九郎、山田熊藏、岡田萬蔵、岩島千吉、秋山叢蔵、大原安兵衛、大原俊七の計八名が参加していた。^{*2}

二 德丸原演練と長崎行

隣国の清朝中國は、イギリスの軍艦の攻撃を受け、大敗北を喫した。

高島秋帆と三九郎との関係については、徳丸原演練以前からあつたとする資料がある。

一つ目は、戸羽山 潤氏編著の『江川坦庵全集 別巻二』の二三〇

(『江川坦庵全集 別巻二』十頁)

頁には、江川と秋帆に関する記事がある。関連部分を要約すると、以下の通りである。江川が天保十一年(一八四〇)の新春早々、家臣の岡田万蔵ら三名を長崎の秋帆の許に派遣した。その後、代官職である江川自身が長崎行を試みたが、叶わなかつた。そこでその代わりに五人の派遣留学生を行かせることとし、厳正に審査され選抜されて派遣された中に斎藤三九郎も含まれていた、と記されている。ただ、この記述は、物語風に書かれているとともに、根拠史料を示さないまま紹介されていることもあり、木村紀八郎氏は、『剣客斎藤弥九郎伝』の中で、この事実については「疑問を挟んでおきたい」としている。

(同書一四五頁)

もう一つは、板橋区立郷土資料館で平成十年十月十七日から開催された特別展『高島平—その自然・歴史・人』の展示図録の中で、梶輝行氏が執筆した『高島秋帆と徳丸原演練』中で紹介されている「天保十二年(一八四二)高島秋帆の江戸滞在中に入門した人物の一覧」表である。その中には、四月に斎藤三九郎の名があり、入門していたことがわかる。なお、その表には、斎藤弥九郎や弥九郎の息子新太郎の名もある。(同書一一四頁)

演練が行われた同じ年の、天保十二年七月には、水戸弘道館の開館式に招待された弥九郎に同道し、他の弟子らとともに模範試合や藩士に稽古をつけていたが、その年の九月には江戸へ戻っている。

その後、三九郎の足取りが明らかになるのは、翌年の天保十三年(一八四二)の六月である。長崎に戻った高島秋帆と浅五郎が、江川英龍に送った六月二十五日付の書簡には以下のように記されている。

一、斎藤三九郎遙ニ罷越申候、当月初着崎仕候無程村上定平参り候而一同麓宅江龍有申候、三九郎之儀ニ付而は御内話之節も御座候間甚心配仕候(以下略)

ここでわかることは、三九郎は六月の初めに長崎に着いたことや程なく三河国田原藩の村上定平とともに麓宅へ入つたこと、加えて三九郎については「御内話之節」もあり心配されていたことである。

木村紀八郎氏は、このことについて、「三九郎は素行放縱で弥九郎の命に従わず、弥九郎が英龍に相談して、英龍の口利きで秋帆に入門したのであつた。」と見ている。(『剣客斎藤弥九郎伝』一五七頁)

三九郎が長崎に入つて約四か月後の十月一日の朝、秋帆は逮捕され、三九郎は仏生寺村に戻つている。

三 青山氏に仕える

長崎より戻つた三九郎は、数年を仏生寺村で過ごしたようである。

斎藤弥九郎の業績をまとめた大坪武門氏が著した『幕末偉人斎藤弥九郎伝』の六九頁には他書からの引用の形で三九郎の徳丸原後について以下のような記述がある。

天保十二年辛巳、武州徳丸原に於て洋式銃隊演習の際、兄弥九郎と共に赴きて砲術方を務めたり。然れども操行修まらず、放縱にして家

兄の命に服せず、遂に郷里に復帰するに至れり。

ここに於て三九郎、終日山野を狩くらして縫に籠を散じたり。時に郷人に剣法を指南して無聊を慰め、数年を送る（以下略）

その後、三九郎は、加賀藩の重臣青山将監に仕えることとなつた。

『石川県史』に引用されている長谷川猷（源左衛門）の国防意見書には、「天保末年、我邦の人斎藤三九郎なる者ありて、此全傳（高嶋流砲術一筆者註）を得て國に帰る。僕雀躍して之を青山老參政に進む」とあり、長谷川の推薦により、青山氏に仕えることになつたことがわかる。

加賀藩史料の弘化二年（一八四五）七月十四日の項には、「青山将監の家来斎藤三九郎の江戸に修行せんとする件を議す」として「官事拙筆」を載せてゐる。これによると、三九郎が江戸へ出て、剣術は弥九郎に、また砲術は村上定平に修行させようとして、先例に従い許可を受けている。

大坪武門氏著『幕末偉人斎藤弥九郎伝』（七〇頁）には、弥九郎が、

長谷川源左衛門に対し弘化二年九月二十三日付で送った札状が引用

されており、この中で、「此度弟儀、為修業出府、私方逗留仕、御国元之様子承り候處、三州村上定平方秘訣傳受之儀も、土佐守様御聞済に相成候に付、當月初旬は當方出立仕候心得に御座候」とあり、この時点では三九郎は弥九郎方に逗留しており、十月初旬にも三河国へ村上定平を訪ねるため出発する予定であることがわかる。

また弥九郎は、この札状の中でも、青山氏に仕えることとなつたこと

を殊のほか喜んでいる。

また、村上定平が加賀藩の重臣長家の陪臣である河野久太郎に充てた書簡が、岩崎鐵志氏の「高島流砲術伝播の研究——村上定平の書簡」^{*3}に紹介されているが、この内、弘化二年十一月廿二日付の書簡では、江戸にいた村上定平が弘化二年十月朔日に三河国田原藩に帰藩し、その後程なく三九郎が来たことを記している。あわせて、大砲の稽古も行い、十一月十九日にはボンベン・ブランゴーゲルなどの稽古を行ふと、三九郎と面会した際にはよろしく伝えてほしいとのあることから、少なくともこの日までには、三九郎は田原藩を後にしている。

翌弘化三年（一八四六）七月二十四日の加賀藩史料の記事には、三九郎が打木浜で大筒を試射するとの許可が下りたことが記され、七月晦日に試射を行つた。

『加賀藩史料』弘化三年八月朔日の条では以下のように記されている。

一、西洋流火術者斎藤三九郎与申もの、去年歟青山将監方へ召抱に相成、先日よりもるちる大筒鑄立出来、右大砲稽古方為致度旨將監より段々願有之、御用番より被相伺、打木浜に而打試等御聞届に相成、則昨晦日打試出来いたし候由

また同年九月十七日の条には、藩主前田斉泰に三九郎が鑄造したモルチル砲等を見せたことが記されている。

〔近敷日記〕

九月十七日

一、青山將監家來斎藤三九郎製造いたし候モルナル等、西洋流之大筒一挺十貫目玉と二貫目玉也。淇水軒より被入御覽候付、今日割場人縣申遣取寄、御庭先御庭へ御手廻りに而為廻候事

ところで、時を同じくして、加賀藩では、重臣長家の家臣である河野久太郎も西洋流の砲術を極めんとしていた。三九郎と同じ村上定平から教えを得ていた。

河野と村上との間には、数多くの書簡が残り、河野が受け取った書簡は、金沢市立玉川図書館の河野文庫に所蔵されており、岩崎鐵志氏によつて翻刻、紹介されている。^{*4}

岩崎氏の指摘によると、三九郎と河野は村上より砲術の教えを受けしており、村上からは、一致協力して萬島流砲術の移植にあたるよう、との説得を受けながら、現実は、三九郎は青山の、また河野は長の陪臣であることから、主家同士の不和軋轢もあって協力関係が取れなかつた。

河野は江戸在住の鉄砲師松下健作を招き、三九郎に遅れるここと一年の弘化四年（一八四七）六月、大砲鑄造に成功している。

四 横山氏に仕官、壯猶館の師範になる

三九郎は、嘉永四年（一八五二）横山氏からの所望により召抱えら

れ、給人組を仰せ付けられた。またこのとき新左衛門に改名している。また、安政元年（一八五四）西洋流砲術等を教授するため、藩の機関として壯猶館が設立されると、その師範に任じられた。壯猶館での活動については、「日本教育史資料」^式一二〇九頁に載せられている、壯猶館稽古割に「斎藤新左衛門門弟」とあるが、それ以外にどのような史料があるのか、今のところ調査が不足している。今後の課題としたい。

五 斎藤家に伝来した史料に見る三九郎

永見市教育委員会では、平成八年に東京の斎藤弥九郎の直系を継がれた斎藤幸子氏より、また平成一四年には弥九郎や三九郎が生まれた永見市仏生寺の斎藤家から関係資料の寄贈を受け、それぞれ目録を作成し、またその一部を翻刻して発刊した。^{*6}

その中に見える三九郎にまつわることについて、少し述べてみたい。

① 文久二年（一八六二）、北岡健三郎、斎藤弥九郎龍善（二代目弥九郎）、斎藤篤信斉（初代弥九郎）の連名で、本家の斎藤新助宛に「本家相続方議定書」を渡している。その中に「新左衛門、又五郎、富之助儀は、篤信斉教示不相成、家業農業無精に候間、追而改心行届候迄、勘當絶交之者ニ付、本家筋には立入一切不相成候者共に候」とあり、新左衛門（三九郎）と弟の又五郎、富之助の三名を勘当している。三九郎については、弥九郎と、本家の父や跡を継いだ伝助との間の書簡に、その行状について困っている、といったも

のが多く残されている。大半は未翻刻であり、今後関連史料を翻刻したいと考えている。

② 三九郎が蝦夷地より取り寄せたテンキ蘭と呼ばれる草の苗を、父の新助が植え付け、繁茂したことから、それを莫蘿に織り、藩に献上した。その苗を藩領内に広く普及させたことを示す文書も多数残されている。嘉永二年（一八四九）に初めてテンキ蘭関連の文書が出てくることから、この苗を三九郎が導入したのはその少し前と思われるが、その経緯については現在のところ不明である。

おわりに

本稿では、三九郎の生涯について、一通り見つめることに努めた。

三九郎自身が書き記した「先祖由緒一類附帳」とその他の史料との整合性が取れない部分もあることから、同史料からは伺えない三九郎の実像に迫りたいと考えた。しかし、筆者自身の調査不足もあり、いまだその全体像を掴むには至っていない。

今後の課題を記し、自らの研究の方向性とすると共に、多くのご叱正を乞うものである。

① 加賀藩における西洋砲術の導入と斎藤三九郎が果たした役割に

ついて未だそのアウトラインも描ききれていないと実感している。

特に高嶋秋帆や村上定平から学んだ「西洋流砲術」とはどのようなものであつたのか、また大砲の铸造や、打本浜での試射はどのよう

に実施されたのか、その実態を明らかにしたい。

② 前述のとおり、斎藤家伝来文書には三九郎に関する文書も多く

残されているが、特に兄弥九郎の三九郎評はかなり手厳しい。これは、厳格な神道無念流の道場を開く弥九郎自身の厳格な性格によるものなのであろうか。眞の人物像を知るためにには、数多く残された文書を細かく見ていく必要があると考えている。書簡には年が付記されておらず、どの時期のものかは、書簡の内容を細かく吟味し、その前後関係などから特定しなければならないが、その書簡等を翻刻することも含め、今後の課題としたい。

なお、本稿を執筆するにあたり、石川県立歴史博物館の本康宏史氏には、資料提供等多大な御協力をいたいた。ここに深甚なる感謝の意を表するものである。

（おだに すすむ 氷見市教育委員会生涯学習課主任）

*1 坂本保富、「武州徳丸原操練に参加した高島秋帆門人——既知史

料の吟味と新史料の紹介による比較検討」、二〇〇六、信州大

学坂本保富研究室

*2 坂本保富氏が前掲書内で紹介する「天保雑記」には、江川太郎

左衛門の家来として、これら八名のほかに柏木莊蔵の名もある。

*3 静岡女子短期大学研究紀要第十六号

*4 同右 参照

*5 「高島流砲術伝播の研究」三河田原藩士村上定平を中心にして」

（吉田忠編「東アジアの科学」、一九八二、勁草書房）、一三七一

二三八頁

*6 平成五年（一九九三）の目録は、「斎藤弥九郎関係資料調査目録」、平成一四年度の目録は、「斎藤家寄贈資料目録」、二〇〇四である。